[報告者公募型テーマセッション]

きょうだいの家族社会学

オーガナイザー：久保田裕之（日本大学）

【趣旨】

日本の家族社会学において、きょうだい（兄弟姉妹）に関する研究がこれまで十分に主題化されてきたとは言いがたい。もちろん、たとえばイエ研究の中には長男の地位をめぐる議論の歴史があり、教育社会学に近い分野では家族内の出生順位と資源分配が子供の地位達成に及ぼす影響が議論されてきた。しかし、夫婦や親子と比較すると、「きょうだいとは何か」といった基底的な問いや、きょうだい間の対立や協働が主題化されることは希であった。この背景には、現実に家族内のきょうだい数が急激に減少してきたことだけでなく、夫婦ダイアドと母子ダイアドを基軸とする近代核家族研究の中で、きょうだいは二次的・派生的な理論的地位しか与えられなかったこともあるだろう。

これに対して、近年ではきょうだいについての社会学的研究が少しずつ蓄積されつつある。たとえば、安達正嗣（2004）は高齢期のきょうだい研究に先鞭をつけたほか、苫米地なつ帆は大規模調査やインターネット調査を通じて、階層研究におけるきょうだい関係の主題化に尽力している（苫米地 2014 ほか）。また、平山亮・古川雅子（2015）は「きょうだいリスク」という言葉で、夫婦関係にも親子関係にも還元されないリスクを描き出そうとしている。

そこで本テーマセッションでは、必ずしも血族・姻族関係に限定されない、擬制やメタファーを含む広い意味での「きょうだい」に着目した研究報告を公募することで、「市民社会の端緒」であり「他人の始まり」とも称されるきょうだいが、変わりゆく現代家族の内外で持つ意味と、機能、その変容と今後の可能性について議論したい（英語での報告も可能です）。

【参考文献】

安達正嗣，2004,「高齢者のきょうだい関係」渡邊秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容』東京大学出版会.

苫米地なつ帆，2014,「定位家族構造・きょうだい構成に関する基礎的分析 ：「家族についてのアンケート」データの概観を通して」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』63(1): 279-299.

平山亮・古川雅子，201,『きょうだいリスク』朝日新書.